

別添4-5

強度行動障害支援における ICF による
QOL 支援・評価について

分担研究報告書

令和5年度厚生労働科学研究費補助金
(障害者政策総合研究事業)

研究課題名(課題番号) : 強度行動障害者支援のための指導の人材養成プログラムの開発および
地域支援体制の構築のための研究(22GC1015)
分担研究報告書

分担研究課題名 : 強度行動障害支援におけるICFによるQOL支援・評価について

分担研究者 : 安達潤(北海道大学大学院教育学研究院)

研究要旨

A 研究目的) 強度行動障害者への支援においてQOL向上に対する支援を充実するため、ICFを援用した支援システム(ICFのシステム)を研修に導入し、その効果を検討する。

B 研究方法) 学習スタイル評価、機能分析に加えてICFシステムによるQOL支援が行動問題の軽減や予防に重要であること、ICFシステムによる情報把握と情報整理の実際、ICFシステムで把握された情報の支援活用という3つの講義への感想、ICFシステムの実践活用による研修前後での対象者変化をICF関連図に基づくICFフォームへの記載内容を検討する。

C 研究結果) 3講義は一定程度の理解が得られた。対象者変化のICFフォームへの記載と検討は、支援結果をICFの観点から捉え返す機会となり、QOL支援への意識を高めた。

D 考察) 3つの講義内容の実施順と再構成、ICF評価・支援検討の労力低減が課題である。

E 結論) ICFによるQOL支援という新たな視点の導入であったが、一定程度の成果を得た。

A. 研究目的

強度行動障害者の支援においては、支援対象者の激しい行動問題に支援者が対処不能に陥り、支援の継続自体に苦慮する状況が起り得る。そのため、支援の焦点が行動問題の軽減のみに向けられるようになっていくことが少なくない。しかし、支援の大きな目的は、強度行動障害の状態像を呈している方々がより快適な生活を送れるようになること、換言すれば、そのような方々のQOL向上を目指すことである。本分担研究の目的は、行動問題の軽減に焦点を当てた機能分析による支援と並行してICF情報把握・共有システム(以下、ICFシステム)(安達・吉川, 2021、安達, 2023)によるQOL支援を全体研究である指導の人材養成プログラムの中で実践し、その効果を検討することである。

B. 研究方法

研究方法の全体は、中核的人材養成研修(以下、養成研修)参加者にICFシステムによる

QOL支援を理解・実践してもらうため、①2つの事前オンデマンド講義の視聴、②ICFシステムによる情報把握(pre)、③ICF把握情報による支援説明の講義、④ICFシステムによる情報把握(post)という構成とした。

以下、①と③について説明する。

①はa)「導入編:本研修の基本的視点と全体像」そしてb)「ICFシステムの基本的視点と使い方」の2つのオンデマンド講義である。

a)の講義は、「強度行動障害の標準支援が環境調整支援であること」「強度行動障害が発生しないための予防的支援の重要性」「ASDの人たちの認知特性(Too much Information)」「日常の快適さの重要性」「機能的アセスメントによる環境調整支援」「学習スタイルに基づく環境調整支援」「ICFシステムによる環境調整支援」「冰山モデル(ICFによるQOL支援を付記)」という内容構成とした。

b)の講義は、「ICFの説明」「生活場面の困難さと環境をセットで捉えることの重要性」「ICFシステムの構成」「活動と参加シート強行QOL

支援版項目の説明」「活動と参加シートの評価・記入方法」「環境お因子強行 QOL 版項目の説明」「環境因子シートの評価・記入方法」「回答分析アプリの使用法」という内容構成とした。

③は「ICF で生活支援／ICF で全体を捉える」とのタイトルで全6回の養成研修の第5回に行った講義である。内容は「ICF による QOL 支援の5つのポイント」「強みの活用」「有効な支援の活用」「QOL 促進環境の提供」「QOL 阻害環境の除去」「活動と参加&環境因子：複数項目を組み合わせた支援」「支援の成果全体を ICF の枠組みでまとめる」「ICF フォームの具体例」「ICF フォームにまとめる際の留意点」という内容構成であり、養成研修最終回である第6回で ICF システムによる QOL 支援を報告するための具体的な手順を説明するものとした。なお、図1は講義の中で例示した支援前の ICF フォーム（対象者の概要）である。ICF フォームを構成する5つの記入欄の健康状態には対象者の医学的診断に係る状態像を記載し、心身機能構造には学習スタイルの評価結果得られた内容、活動と参加には ICF システムの評価から QOL 支援に関連すると思われる項目の結果を当該項目の支援カテゴリと当該項目の状態像を「困難の状況、支援の有無、支援の効果」の情報とともに記載する。なお、支援カテゴリとは、ICF システムの評価から導出される、

当該項目の支援状況を表すカテゴリで強み、支援維持、支援修正、支援考案、情報なしの5つである。環境因子については、対象者の QOL 支援との関係で阻害的な環境と促進的な環境を記載することとした。個人因子については、生活年齢、性別、発達年齢、行動問題得点、居住形態などの情報を記載する。

養成研修の効果検討であるが、上述の3つの講義について、受講者にアンケートを実施し、講義の理解度、各スライドの改善点、感想（自由記述）を求めた。また、ICF システムによる QOL 支援については、養成研修プログラム終了時に各参加事業所から提示される「実践報告フォーマット」をいくつかを抜粋し、ICF 支援に関わる記述と支援前後の ICF フォームの変化を検討した。

【倫理面への配慮】

本分担研究は、全体研究を構成する一部として実施されており、倫理面への配慮は全体研究として行われている。

C. 研究結果

1) ① a) 「導入編：本研修の基本的視点と全体像」のアンケート結果（回答数 39）

1) 講義全体の理解度については、「すべて理解できた」が 64.1%、一部理解できなかったが 35.9%、理解できなかったは 0%であった。

| 対象者の概要（例） pre（支援前） | |
|--|---|
| 健康状態 重度知的障害、ASD、てんかん、便秘傾向、朝起きられない | |
| 心身機能・構造 <ul style="list-style-type: none"> ・作業に取り組みない（実行機能の問題） ・物の位置が気になる（ルール学習の強さ） ・生活関連刺激の苦手さ（感覚特性、独特な注意） ・対人刺激の苦手さ（社会的認知、感覚特性？） ・見て学習することが得意（暗黙的学習の難しさ） | 活動・参加（※ICFシステム項目・補足情報参考）：QOLに影響している項目を選定 <ul style="list-style-type: none"> ・（強み）記号やシンボル、絵や写真の理解【d3151-2】（絵や写真は理解できる） ・（強み）まねをして学ぶこと【d130】（見て学ぶことができる） ・（支援修正）一つの作業や活動を一人ですること【d210a】、問題を解決すること【d175】 困難あり：何をしてもよくわからない、作業に取り組むことができない 支援あり：プレハブでワークシステムを用いてバズル→余暇（漫画）のスケジュール実施 効果小：活動に取り組むことができるが、24時間365日マンツーマン対応で持続困難 ・（支援修正）場面に応じた行動のコントロール【d250】 困難あり：他利用者の物の置き方が気になり、他者への暴力行為あり 支援あり：24時間365日マンツーマンによる見守り支援 効果小：支援員の制止で暴力行為に至らないが、ご本人のQOLは上がらず、24時間365日マンツーマン対応で持続困難 ・（支援考案）基本的な対人関係【d710】、非公式の対人関係【d750】 困難あり：GHの共用スペースで他の利用者と同関するスキルがない。加えて、他利用者への暴力行為があり制止される。 支援なし：支援員の関わりは暴力の制止のみにとどまっている。（ご本人のQOLは上がらず、本2項目には効果なし） |
| 環境因子（※ICFシステム項目・補足情報参考）：QOLに影響している項目を選定 <ul style="list-style-type: none"> ・阻害環境：共用スペースでの生活（【e240, 250, 260等】生活関連刺激や対人刺激【d710, 750】への苦手さ？） ：睡眠薬【e110b】 ・促進環境：ワークシステム（【e1351】仕事のしやすさを支援する製品と用具） ：生活介護事業所でのプレハブ設置（生活関連刺激や対人刺激の除去） ：職員3名で交代しながらの個別対応（【e340, 440】） | 個人因子 <ul style="list-style-type: none"> ・50代男性 ・障害支援区分6 ・行動関連項目12点 ・発達年齢4歳3か月 ・グループホーム（5人暮らし） ・生活介護事業所に通所 |

図1 ICF フォームの具体例

2)各スライドの改善点については、スライド全22枚の回答数の平均値〔範囲〕は「このままでよい」が36.91〔39,34〕、「改善点あり」が2〔5,0〕、「不要」が0.09〔1,0〕であった。

5名が「改善点あり」としたスライドは、全体に文字数・文章量が多く込み入った感じのするものであり、同タイプ他スライド3枚に4名が同じ評価をしていた。また、改善点として記述された内容としては、「情報量が多い」「文字が多すぎる」「(講義が丁寧なので)資料は必要ポイントだけでよい」「色を使う量を減らした方がよい」といったコメントが多かった。

2)①b)「ICFシステムの基本的視点と使い方」のアンケート結果(回答数39)

1)講義全体の理解度については、「すべて理解できた」が43.6%、一部理解できなかったが56.4%、理解できなかったは0%であった。

2)各スライドの改善点については、スライド全31枚の回答数の平均値〔範囲〕は「このままでよい」が38.19〔39,36〕、「改善点あり」が0.77〔3,0〕、「不要」が0.03〔1,0〕であった。

3名が「改善点あり」としたスライドは、「活動と参加シートの記入」および「活動と参加シートの回答分析」のスライドであった。「活動と参加シートの記入」については、実際にデータ記入を行っているPC画面を録画した動画ファイルをスライドに貼り付けて視聴してもら

ったが「画面のどこにポインタがあるのかわかりづらい」に加え、説明が十分ではないといったコメントが自由記述として記載された。

「活動と参加シートの回答分析」については、「もう少し細かく説明してほしい」「やり方がわかりにくかった」などのコメントが自由記述として記載された。また、大きな表を配置したスライドについては2名から「改善点あり」が示された。その他、「記載例があるとわかりやすい」とのコメントがあった。

3)③「ICFで生活支援/ICFで全体を捉える」のアンケート結果(回答38)

1)講義全体の理解度については、「すべて理解できた」が55.3%、一部理解できなかったが42.1%、理解できなかったは2.6%であった。

2)各スライドの改善点については、スライド全19枚の回答数の平均値〔範囲〕は「このままでよい」が37.53〔38,36〕、「改善点あり」が0.37〔1,0〕、「不要」が0.11〔1,0〕であった。

「改善点あり」との回答となったスライドは7枚あり、「記入例がいくつか(注:複数の意)あるとよりわかりやすい」が5枚、スライドに記載した支援内容への疑義が1枚、言葉が難しいとのコメントが1枚であった。

3)講義への感想(気づいた点や意見)については、第5回養成研修全体について問うたものである。第5回養成研修は、本講義に加えても

・ICF関連のシートの記入例はもっと早く知りたかった。
・例えて記入してあるものがあるとイメージが湧きやすく感じた。ICFの説明が早く、ついていけなかったのももう少しゆっくり説明していただきたいです。
・ここへきてやっとICFの意味が分かった気がします。研修が初めにあったので、これをどう活用するのだろうかと思って取り組んでおり、もっと早くに気が付ければよかったですと思います。
・ICFについての説明は事前のオンデマンド視聴のみだったので、講義の最初でも良いと思いました。
ここから当事者さんのQOL向上に結びつけるため、どのような支援を検討・実施していくのかを考えるのが、今回の研修の流れだったかと思いますが、皆さん困難事例を挙げてきているので、目の前の課題を何とかしようと考えてしまう傾向が強かったように思います。
・ICFからの記入の仕方は今回の講義で理解できたと言っている受講生がほとんどでした。ICFについては、もう少し早い時期に講義や事前動画で説明があった方が受講生の理解に繋がると思いました。
・ICFデータによるQOL支援のシートの使い方がまだコツが掴めず上手に使えていないので、別ケースなど自分なりに使って慣れてみたいと思います。
・ICFに基づく考え方や記載については、見ただけではすぐに分からないので、時間をかけて講義を行ったほうが良いと思います。(事前講義動画だけでなく、講義1回目以降等の前半に)
・スライドに意見するほどの立場ではないですが、ICFフォームの支援後の書き方や考え方については1時間くらい詳しくゆっくりきいたらもう少し理解が深めれそうでした。
・最初に取り組んだICFが具体的にどう活用されるのか、理解できました。利用者の生活全体の快適さについてICFの観点から考えることの重要性を認識できました。
・今回の講義を聞いてICFの事を少し理解する事ができました。今回の研修でICFの事を取り入れるのであれば、この講義はもう少し早い段階に設定した方が、混乱なく課題に取り組めるのではないかと感じました。

図2 第5回養成研修の感想からICF支援に関する抜粋コメント

う一本の講義「行動の機能に基づいた支援計画の見直し」（田熊講師）と参加事業所からのケース報告で構成されていた。そのため、ICFシステムによる QOL 支援に関わる内容を持つ感想コメントを抜粋し図 2 に示す。

コメントでは「ここへ来てやっと ICF の意味がわかった気がします」「ICF 関連のシートの記入例はもっと早く知りたかった」「最初に取り組んだ ICF が具体的にどう活用されるのか、理解できました」「利用者の生活全体の快適さについて ICF の観点から考えることの重要性を認識できました」などの内容が記載されており、事前オンデマンド講義だけでは、ICF 支援の重要性に対する十分な理解に至っていないことが示唆された。

4) ICF システムによる QOL 支援に関わる実践報告フォーマットの分析

図 1 に示す ICF フォームは ICF 関連図を反映する構成となっており、支援対象者の全体像を描くものとなっている。第 6 回養成研修では、39 箇所すべての参加事業所が ICF フォームに加えて、学習スタイル分析、機能分析による支援構築のプロセスの記載フォームを含む実践報告フォーマットを用いて、研修の中で実践してきた支援結果を報告している。39 事業所の実践報告フォーマットを対象に「ICF システムによる情報把握を行い、当該情報を考慮した

QOL 支援が行われたかどうか」を確認した。但し、1 事業所の実践報告フォーマット破損のため、確認数は 39 となっている。以下、フォーマットの項目構成から ICF システムによる QOL 支援に関連する項目を抜粋し確認結果を示す。

(1) 対象者の概要(pre)は記載数 39 で 100%、(2) ICF アセスメントは記載数 27 で 69.2%、(3) ICF 支援計画は記載数 20 で 51.3%、(4) 研修を通じた対象者の変化(post)は記載数 37 で 94.9%、(5) 支援者の変化は記載数 17 で 43.6%であった。(1)と(4)は講義で図 1 のように例示したため、ICF 項目への言及率は高かった。(2)と(3)については「ICF アセスメント」「ICF 支援計画」といったタイトルスライドがあり ICF システムで把握された情報に言及しているものをカウントしている。(5)については、記述の中で ICF や QOL という語が用いられているものをカウントした。

以下、(1)対象者の概要(pre)と(4)研修を通じた対象者の変化(post)について、ICF システムによる QOL 支援実践が特に良好に記述されている 2 事業所の ICF フォームを抜粋し、図 3 a, b、図 4 a, b に示す。各図の a が pre、b が post であるが、フォーム記載の指示として、支援により状態像に変化があった項目には赤字表記とし、各項目の支援カテゴリーの変化を明示することとした。

2. 対象者の概要

健康状態 重度精神遅滞

| | |
|--|---|
| <p>心身機能・構造</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文字や絵などで理解が深まる（見て学習することの得意） ・場所が変わるとやる事が一緒でも疲れ出しが多くなる（場所的学習が難しい） ・相手の言葉が聞かずにいる（聴覚的学習が難しい） ・本人は全く気づかない事でも他者がツラクをしたり怒らせているのが苦手（他者な法則） ・記憶で覚えている事がある（実行機能の問題） ・どうしたら終わりが伝えないと理解できない（実行機能の問題） ・本人の立場に合わせず、自分のペースで進めよう（実行機能の問題） ・言葉での情報は理解しにくい（言葉と視覚的問題） ・自分の気持ちを言葉や文字で伝える事が苦手（言葉の機能的問題） ・大抵の印刷の作業で大意を取り除くという経験が上手く働けていた（言葉と視覚的問題） ・他者と関わらず、関わっても一方的（社会的認知） ・相手が困っていても相手の役割までやってみよう（社会的認知） ・他者の衣服を脱ぎ捨てよう（社会的に苦痛） ・他者のやり方が自分とは違う（社会的認知） ・聴きたいのが苦手（感覚的問題） | <p>活動・参加（※ICFシステム項目・補足情報参考）：QOLに影響している項目を選定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（強み）手と足をうまく使って物を投げる【d445】 ・（維持調整）読むことの理解と音程【d140】ひらがな、カタカナ、簡単な漢字が読める ・（維持調整）日常生活に必要な行為やスキルの習得【d155】モザイク、文字や絵で習得できる ・（維持調整）思考すること【d163】文字を使った予定表、絵や写真を使って場所をイメージ ・（維持調整）書き言葉によるメッセージの理解【d325】ふりがな、文は短く端的に書く ・（支援修正）課題や作業が終わるまで注意を逃さないこと【d155】 <p>困難あり：見通しが立っていない状況や人の多い所や騒がしい環境では、その場から離れてしまう</p> <p>支援あり：予定を事前に伝え見通しが持てるようにしている</p> <p>効果小：活動のやり方がわかられば集中して取り組めることもある</p> <p>・（支援修正）意思決定すること【d177】</p> <p>困難あり：複数の選択肢や多くの商品から自分の好きな物を選ぶことができるが、それが良かったか否かは自分の感覚によるところが多い</p> <p>効果あり：選定する際に即座声かけて助言している</p> <p>支援あり：選定する際に即座声かけて助言している</p> <p>効果小：声かけての助言に引っ張られてしまい本人の意思が反映されなくなってしまうことが多い気がする</p> <p>・（支援考案）一つの作業や活動を一人ですること【d210a】</p> <p>困難あり：ADLは自立している。活動や作業の手順が理解できている状況であれば一人でできると考えられる</p> <p>支援なし：</p> <p>効果なし：</p> |
| <p>環境因子（※ICFシステム項目・補足情報参考）：QOLに影響している項目を選定</p> <p>障害環境：【e250】音。食堂で他利用者が騒がしいのは暴言や他音が出やすくなることから不快に感じているように思われる。音楽会や花火の音は気にならない</p> <p>促進環境：【e110a】食べ物や飲み物。週に1回買い物に行きうまい棒、ポテトチップスを購入し食べることが楽しみにしている。好きな物を買に行ける機会が少ない。</p> <p>【e110b】薬や栄養補助剤。薬を飲むことで精神的に安定して過ごせている。</p> | <p>個人因子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年代 25~29 ・性別 男 ・障害支援区分 6 ・行動関連項目 不明 ・発達年齢 不明 |

図 3a ICF フォーム「対象者の概要 (pre)」の一例

1.0. 研修を通じた対象者の変化

| 健康状態 重度精神遅滞 | |
|---|---|
| <p>心身機能・構造</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文字や絵などで理解が保たれる（見て学習すること困難） ・場所が変わるとやる事や順序がわからなくなる（視覚的学習が難しい） ・特定の作業や手順からずれてしまうと（視覚的学習が難しい） ・本人はよく聞かない事でも他者が声をかけているか分からない事がある（聴覚的学習が難しい） ・部屋で通している事が多い（実行機能の問題） ・どうしたら終わるか分からない（理解できない）（実行機能の問題） ・自分のために学習する事がない（言葉と職業知識） ・言葉で理解が難しい（言葉と職業知識） ・自分の興味ある言葉や文字で伝える事が苦手（言葉と職業知識） ・次の活動の準備ができていない（言葉と職業知識） ・部屋で通っている事が多い（言葉と職業知識） ・他者と関わらず、関わっても一方的（社会的認知） ・他者が関わっていても相手の役割がわかっていない（社会的認知） ・物事の優先順位がわからない（社会的認知） ・物事のやり方が自分本位（社会的認知） ・騒がしいのが苦手（聴覚的問題） | <p>活動・参加（※ICFシステム項目・補足情報参考）：QOLに影響している項目を選定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（強み）手と腕をうまく使って物を投げる【d145】 ・（維持調整）読むことと理解を習得【d160】むらむら、カタカナ、簡単な漢字が読める ・（維持調整）日常生活に必要な行為やスキルの習得【d155】モデリング、文字や絵で習得できる ・（維持調整）思考すること【d165】文字を使った予定表、絵や写真を使って場所をイメージ ・（維持調整）書き言葉によるメッセージの理解【d202】むらむら、文は短く端的に書く ・（支援修正←支援修正）課題や作業が終わるまで注意をそらさないこと【d161】 困難あり：見過ごし立っていない状況や人の多い所や騒がしい環境では、その場から離れてしまう 支援あり：洗濯したみの自立課題を行う場所や音や人の刺激が少ない自宅を特定した。それに合わせて自立課題の流れがわかる表を作り本人に提示した 効果大：洗濯日に行っているのが自分で洗濯するための課題を行う事ができるようになった ・（支援修正←支援修正）意思決定すること【d177】 困難あり：複数の選択肢や多くの商品から自分の好きな物を選ぶことができるが、それが良かったか否かは自分の感覚によるところが多い。 支援あり：自立課題の強化として複数のお菓子から選択できるようにしている 効果小：選択に対して支援員の介入がなく自分の意思で選択できている。意思決定の機会が少ないため効果としては小さいが、確実に本人が意思決定できている ・（支援修正←支援修正）一つの作業や活動を一人ですること【d210a】 困難あり：ADLは自立している。活動や作業の手順が理解できている状況であれば一人でできると考えられる 支援あり：選択したみの自立課題を提供した。課題の工程表を使用し、たみ方と流れをモデリングを指さして教授し、人の出入りの少ない静かな環境の自宅 効果大：短時間で他者が影響と介入を受けずにできる事は生活発から考えると効果は小さいが、今後のQOLの向上を考えると大きな一歩である |
| <p>環境因子（※ICFシステム項目・補足情報参考）：QOLに影響している項目を選定</p> <p>阻害環境：【e250】音。食堂で他利用者が騒がしいのは暴言や他音が出やすくなることから不快に感じているように思われる。音楽会や花火の音は気にならない</p> <p>促進環境：【e110a】食べ物や飲み物。週に1回買い物に行きうまい棒、ポテトチップスを購入し食べることが楽しみにしている。好きな物を買に行ける機会が少ない。（お菓子を選択して食べられる機会が増えた）</p> <p>【e110b】薬や栄養補助剤。薬を飲むことで精神的に安定して過ごせている。</p> | <p>個人因子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年代 25~29 ・性別 男 ・障害支援区分 6 ・行動関連項目 不明 ・発達年齢 不明 |

図 3b ICF フォーム「研修を通じた対象者の変化(post)」の一例

2.対象者の概要 pre(支援前)

| 健康状態 中度知的障害、自閉症 ・高血圧（原発性アルドステロン症） ・皮膚疾患（頭部の脱毛） ・便秘傾向 | |
|---|---|
| <p>心身機能・構造</p> <ul style="list-style-type: none"> ・着目すべき場所への注意が困難（独特な注意） ・自ら過ごし方を決め、順序だてて行動することは難しい （実行機能の問題） ・抽象的な意味理解、相手の立場に立ち考えることは困難 （社会的認知） ・ルーチンでの活動は可能（ルールに基づいた学習の強さ） | <p>活動・参加（※ICFシステム項目・補足情報参考）：QOLに影響している項目を選定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（強み）一つの作業や活動を一人ですること【d210a】（ルーチンでの活動はできる） ・（強み）声によるメッセージの伝達【d331】（限られた場面において自発的に伝達できる） ・（支援修正）課題や作業が終わるまで注意をそらさないこと【d161】、ストレスや不安を伴う作業や活動の遂行【d240】 困難あり：集中心力は長く続かない、職員から指摘や介入される場面で不穏な発言や大声を出す 支援あり：量やタイマーで終わりを示す、過度な介入をしない 効果小：早く終わらせることに意識が向いている、介入しないことで作業へ取り組みなくなる ・（支援修正）日常生活に必要な行為やスキルの習得【d155】 困難あり：他者への意識が向きにくい、手先の不器用さから複雑な操作を行うことは難しい 支援あり：関わりの場面では支援者がモデルを見せる、動線整理。取り扱いやすい部材の使用 効果小：習得には至っていない。部分的な支援に留まり、状態によっては取り扱えない ・（支援修正←支援修正）ことばの習得と使用【d133】 困難あり：1、2語文の表出はあるが限定的。限られた場面では「～ない」「～ください」と表現。 |
| <p>環境因子（※ICFシステム項目・補足情報参考）：QOLに影響している項目を選定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・阻害環境：騒がしい周囲の状況【e250】、温度や湿度【e2250, e2251】 ・本人に合った活動が提供されていない【e340, 440】 ・促進環境：ワークシステム（【e1301】仕事のしやすさを支援） ・グループホーム職員との連携、情報共有【e340, 440】 ・扱いやすい私物【e1150】 | <p>個人因子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・50代女性 ・障害支援区分6 ・行動関連項目 ?点 ・IQ 43 ・グループホーム（5人暮らし） ・生活介護事業所に通所 |

図 4a ICF フォーム「対象者の概要(pre)」の一例

6.研修を通じた対象者の変化 post(支援後)

| 健康状態 中度知的障害、自閉症 ・高血圧（原発性アルドステロン症） ・皮膚疾患（頭部の脱毛） ・便秘傾向 | |
|--|---|
| <p>心身機能・構造</p> <ul style="list-style-type: none"> ・着目すべき場所への注意が困難（独特な注意） ・自ら過ごし方を決め、順序だてて行動することは難しい （実行機能の問題） ・抽象的な意味理解、相手の立場に立ち考えることは困難 （社会的認知） ・ルーチンでの活動は可能（ルールに基づいた学習の強さ） | <p>活動・参加（※ICFシステム項目・補足情報参考）：QOL向上に関わる支援実施・支援内容変更を記載</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（強み）一つの作業や活動を一人ですること【d210a】（ルーチンでの活動はできる） ・（強み）声によるメッセージの伝達【d331】（限られた場面において自発的に伝達できる） ・（維持調整←支援修正）課題や作業が終わるまで注意をそらさないこと【d161】、ストレスや不安を伴う作業や活動の遂行【d240】 困難あり：集中心力は長く続かない、職員から指摘や介入される場面で不穏な発言や大声を出す 支援あり：活動時間を示し、ワークシステムを用いて支援。課題設定の見直し 効果大：早く終わらせることへ意識は向くが一定時間作業へ取り組むことができるようになった。 ・（維持調整←支援修正）日常生活に必要な行為やスキルの習得【d155】 困難あり：他者への意識が向きにくい、手先の不器用さから複雑な操作を行うことは難しい 支援あり：関わりの場面では手続きを入れる。活動内容の見直し。取り扱いやすい部材の使用 効果大：手続きへの着目が難しく再考が必要。扱いやすい用具の使用で自立度が部分的に向上。 ・（支援修正←支援修正）ことばの習得と使用【d133】 困難あり：1、2語文の表出はあるが限定的。限られた場面では「～ない」「～ください」と表現。 支援あり：ヘルプカードの使用を教授した。 効果小：表出できる時もあるが、カードの使用は定着せず。 |
| <p>環境因子（※ICFシステム項目・補足情報参考）：QOL向上に関わる環境支援を記載</p> <ul style="list-style-type: none"> ・阻害環境：騒がしい周囲の状況【e250】（作業環境変更、リラクゼーション時間の設定）、温度や湿度【e2250, e2251】 ・本人に合った活動が提供されていない【e340, 440】（活動バランスの見直し） ・促進環境：ワークシステム、スケジュール、置き場の整理（【e1301】仕事のしやすさを支援） ・グループホーム職員との連携、情報共有【e340, 440】、扱いやすい私物【e1150】 | <p>個人因子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・50代女性 ・障害支援区分6 ・行動関連項目 ?点 ・IQ 43 ・グループホーム（5人暮らし） ・生活介護事業所に通所 |

図 4b ICF フォーム「研修を通じた対象者の変化(post)」の一例

D. 考察

事前講義については、① a)「導入編：本研修の基本的視点と全体像」は「理解できなかった」との回答はなかったものの、「一部理解できなかった」との回答が 35.9%であった。この第一の理由は改善点で示されたように、文字数・情報量の多いスライドが多かったことが上げられる。さらに ASD の認知特性について「Too much Information」というキーワードを用いて詳細に説明したが、一般に知られている症状ではなく、その背景に言及したことにあると思われる。加えて ICF による QOL 支援、生活の快適さと行動問題の関連という新たな観点が盛り込まれていることも影響したように思われる。

① b)「ICF システムの基本的視点と使い方」については「理解できなかった」との回答はなかったものの、「一部理解できなかった」との回答が 56.4%であった。この第一の理由は、先の講義で新たな観点として盛り込まれた ICF による QOL 支援を実施するツールの説明であったことに加え、短い時間の中で「活動と参加シート」「環境因子シート」の記入方法と、記入データの分析アプリの使用方法、そして分析結果の支援活用という多くの内容を説明したことがあったと思われる。理解を図るために、データ記入の方法や回答分析アプリの使い方は、実際の操作動画を視聴してもらう工夫を入れたが「視聴環境の問題カーソルが見えづかった」とのコメントがあったように、この工夫がうまく機能しない受講者も一定程度いた可能性もある。

③「ICF で生活支援／ICF で全体を捉える」については、「理解できなかった」の回答が 2.6%（1名）あり、「一部理解できなかった」が 42.1%（16名）、「全て理解できた」が 55.3%（21名）であった。図 2 に示した本講義の感想には「ここへきてやっと ICF の意味が分かった気がする」「最初に取り組んだ ICF が具体的にどう活用されるのか、理解できた」「ICF からの記入の仕方は今回の講義で理解できたと言っている受講生がほとんどだった」といった内容があり、今回の講義構成では、ICF データは把握・記入を行っていたものの、その作業の意味が十分に理解されない状況で進められてきたことが示された。

以上、講義については、事前オンデマンド講義の結果と、③の講義の結果を考え合わせると、図 2 に示した感想にある「この講義はもう少し早い段階に設定した方が、混乱なく課題に取り組めるのではないか」のように、講義全体の構成と順序を再検討することが、ICF のシステムの活用につながると思われる。再構成については、今回の講義で改めて理解が深まったこと背景には、既に ICF システムの情報把握作業を経験していたということもあると考えられるため、データ記入の実例とその実践での活用を織り交ぜた講義内容の構成が求められると思われる。

ICF システムによる QOL 支援に関わる実践報告フォーマットの分析については、ICF アセスメントの記載の有無によって報告を分けると、ICF アセスメント記載ありの 27 報告中、ICF 支援方針記載ありは 20 報告で、74.1%であった。一方、ICF アセスメント記載なしの 12 報告に、ICF 支援方針記載ありの報告は 0 であった。また ICF アセスメント記載ありの 27 報告中、支援者の変化の記載に ICF または QOL の文言が確認できたのは 14 報告 51.9%であった一方、ICF アセスメント記載なしの 12 報告中では 3 報告 25%であった。この分析からは、ICF システムによるデータ把握からアセスメントへの橋渡ししが、その後の QOL 支援における活用において重要であることが示唆される。この意味においても、先の講義で述べた③「ICF で生活支援／ICF で全体を捉える」で示した講義内容を研修全体の早期に設定することが重要であると思われる。

また、図 3 a, b、図 4 a, b に示す QOL 支援が良好な例の ICF フォームからは、機能分析による支援や構造化による支援の結果を ICF の観点から記述できることが確認できる。こういった ASD 特性と環境のミスマッチから発生する問題行動に焦点化した支援や ASD 特性に応じた構造化支援を ICF が示す QOL 観点で表記できることへの気付きは、行動問題を単に緩和させるための支援ではなく、生活の快適さを向上させる支援の重要性を改めて意識していくうえで ICF フォームによる表現は重要であると思われる。

最後に、ICF フォームへの QOL 支援の記載であるが、当然のことながら、参加事業所によっ

てバラツキは認められた。しかし支援結果を ICF 項目の表記に読み替えて、フォームに落とし込んでいくという作業自体を行うことが、支援全体を ICF の観点で眺め直すことに繋がり、行動問題への対応の苦慮から、支援の捉えがその軽減へと狭隘していく状況を転換し、QOL 向上の観点から支援を捉え返すことへとつながっていくのではないかと期待する。

E. 結論

強度行動障害の支援に、ICF のシステムによる情報把握と QOL 支援の観点を導入することにより、支援者に QOL 向上を意識してもらうことは一定程度行えた。

一方、ICF システムによる「環境とセットで個人を捉える」評価は、従来の特性に絞り込んだ評価とは異なる捉え方であり、理解に一定程度の時間を要すること、さらに、ICF 項目が網羅的であるために作業量が多くなること、そしてエクセルシートによる情報記入と回答分析アプリの使用というあらたなツールを操作すること、といった課題も把握された。

これらの課題を解決していく上で、支援全体を ICF 項目が関連図の観点で捉え返す ICF フォームの活用は重要であり、その活用に向けて、今回の養成研修の内容と ICF フォームの捉え方を要所要所でリンクさせるとともに、養成研修の早期に「ICF による QOL 支援」の基本的考え方を具体的に伝達していくことの重要性が確認された。

【文献】

- 1) 安達潤, 吉川徹 (2021) : ICF 情報把握・共有システムを活用した多領域連携が知的・発達障害の早期支援にもたらす効果—愛知県碧南市での社会実装研究を通じて—, 小児の精神と神経 第 60 巻 4 号, p. 309-324.
- 2) 安達潤 (2023) : 自閉スペクトラム症および注意欠如多動症版 International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF) コアセットの ICF 情報把握・共有システムへの導入とその効果, 自閉症スペクトラム研究 第 21 巻 1 号, p. 5-14.

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし